
オセロ

聖美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オセロ

【Nコード】

N3060H

【作者名】

聖美

【あらすじ】

同性愛者である小説家の先生とのラブ？コメディ！。

ただのつたない編集部員ですから！

ピンポン！

「やっときたか。待っていたぞ！」

「まずは洗濯と、書斎の掃除と、腹が空いたから何か作ってくれ。」

どうしてこの人はいつもこうなんでしょう。ほんとに。私は家政婦じゃないっつーの！！！！

私はただの出版社の編集部員にすぎないのに、この人はまったくおかまいなし。

朝井 雪華 2? 歳。

この先生、天美 蓮 の担当になってもうすぐ1年が立とうとしてるのに、この人は初対面からこの調子。私は出来上がった原稿を取りにきてるだけなんだけど……。小説家の考えていることはまったく理解できません。

「先生、私も忙しいんです。担当は先生だけじゃないんですから！」

「あれ。君もやっとな仕事を任されるようになったか。良かったよかった！ ま、したっぱに取られないように気をつけなさい。」

まったくこの人は、悪気はないのだろうけど一言多いぞ！！そもそ

もそう思うなら原稿とつと渡せー!

……なんだかんだ言ってるやっつてしまおう私も私んだけど、やり始めたらしきがないので、

ピンポーン!!

「いらっしゃーい。いつもご苦労さま!今日は学校?アルバイトだったのかな?　とりあえず洗濯物は済んだんだけど書斎の掃除が途中なのと先生はとお腹が空いてるみたいなの。後はお願いできるか!」

「いつもすみません。　ご迷惑をおかけして。」

「いいのよー。啓くんも大変でしょー。先生のお世話なくちゃいけないくて。」

「僕はいいんです。好きでやってるから……。」

なーんて可愛らしいんでしょ。そう、この子は先生のボーイフレンド。　彼氏であります。

大学2年生には見えない初々しさがあるというか、その場にいるだけで可愛がられるタイプ。

クウォーターなので瞳がうっすらスカイブルー。　なんでこんな可愛らしい子が先生の彼氏になってしまったのでしょうか?　不思議すぎる!!!

となると、この方たちは同姓を愛すゲイということになります。

一応、私にも男らしきものはいます。

プルルルルルル。

「はい。」

「あ、もしもし、雪華？ 今大丈夫か？ 悪いんだけど今日行けなくなっただー。ごめん。」

今日じゃなくて今日も！ だろ。 最近電話の相手が彼氏なのか分かんなくなってきました。

付き合って3年目。IT関連の会社に勤めてる彼は、徐々に仕事が忙しくなり最近ではずっとこの調子。付き合う前からそんなことは目に見えてたはずなのに。大学の先輩で、当時はみんなからも信頼を得ていた存在だったからきつと職場でもそうなるんだろうって思っていたのに、いざなるところも彼女に冷たくなるもんなんだとしみじみ実感。

「もういい！ 仕事とお付き合いなさったら！」

プチッ。ツーツー・・・

何年かぶりに彼氏らしきものに怒りの携帯切りをしてしまいました。

ピンポーン！

ピンポーン！　ピンポーン！ピンポーン！

ガチャ。　ドタドタドタドタドタ！

「蓮先生！　いるなら出てくださいよ！」

「何を言ってる。朝っぱらからうるさいぞ！」

「今何時だと思ってるんですか？　午後の14時ですよ！　原稿が送られて来てないのでわざわざ取りに来たんですよ。一昨日お願いしておいた短編小説の原稿できてますよね？」

「一昨日？　おととい、おととい・・・・・・あれ・・・・・・何だっけ？」

何だっけじゃないしー！！！！　ほんとにこの人は・・・・・・
マイペースすぎる。

「だから！」

「あ、分かった、分かった。　短編小説のことだろうか？」

だからそう言ってるんですけど。

「すまんすまん。昨日書こうとした時に啓とこういうことになってしまった為、できていない！　な、啓。」

「すみません。　僕が悪いんです。　僕が蓮を誘ったから……。」

「そうだ！啓、おまえが悪い！お前がおれを強引に誘うからだ！」

ベットでくつつぎながらそういうことを簡単に発しないでください。とにかく私はあなたたちのいちやいちゃぶりを見にきたのではなく、今日締め切りの原稿を取りにきただけなのです。

「先生！行きますよ！！」

「どこへ？」

「決まってるでしょう。先生のお部屋ですよ！書き終わるまで一歩も外に出しません！！分かりました？」

「啓〜！」

「今日中に出していただかないと先方もひどく困られますので願います。」

「君が上司に怒られるだけだろう……。」

「何か言いました？」

「何でもありません。」

まったく、一言多い上にマイペースで迷惑をかけるのが大のお得意なようです。

もうひとつの田川先生なんて、玄関先で原稿を受け取ったらハイ、ご苦労様で終わる先生なのに。どうしてこうも違うんでしょう。

プルルルルルル。 カチャ。

「すみません。朝井ですが三島編集長お願いできますか？」

「うん？ どうした？」

「編集長すみません。風邪をこじらせてしまいまして、今日だけ有給を取らせていただけないでしょうか。」

「ダメだとは言えんが、お前の代わりは沢山いるということを忘れるなよ！」

なんて冷たい上司なんでしょう。なんて冷たい職場なんでしょう。姉さんはなんでこんな仕事に就きたかったんだろう？ 毎日がサバイバルみたいな職場で私も良く生き延びてきたと思う。これも、姉さんがいつも背中をおしてくれているからなんだろう。

ゴホッ！ゴホッ！

こんなとき一人でいるのはとても寂しいしとても心細い。誰かがそばにいてくれれば、風邪も速く治りそうなのに、彼氏に携帯切りしてからは何も連絡がないし、こっちからもする気にはなれない。どこかで浮気でもしてるんじゃないのかな？ それならそれでしょうがない。

先生の原稿、誰が取りに行ってるんだろ。川瀬くんかなー。川瀬くんかっこいいから先生口説かなきゃいいんだけど。それはないか。先生は啓くん一筋だものねー。

ピンポーン！

ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！

誰？　しばらく眠ってたみたいでいきなりの音にビックリした。もしかして携帯切りした雄介？　雄介なら鍵を持ってるはずだから・・・
誰だろう！

ガチャガチャ！

ダダダダダッ！

何！ものすごい勢いで近づいてくる！　でも起き上がれない！
変質者？　どうしょーーーーー！！！！

「おい！大丈夫か！生きてるか！！」

ポカーン・・・・・・・・・・っ

て先生！　なぜここに？　なぜ？　なぜ？

これはきつと夢だ！　幻だ！！

「管理人に君が死にそうだと言ったらすぐに鍵をくれたぞ。」

何も大げさな。　風邪をひいたくらいで死んでたら世界はパニックですよ。

やっぱりこの人は先生なのか・・・。

「先生、どうしたんですか？　原稿は？　ちゃんとあげたんですか？」

こんな時でも仕事のことが気になってしまう私って・・・・・・。

「安心しろ。大丈夫だ。どうにか間に合わせた！」

ギリギリだったんですか！

「てっきり君が取りにくるとばかり思って仕事を用意しておいたのに、知的な感じのハンサムボーイが来たからビックリしたよ。その子から君が風邪で寝込んでいると聞いて様子を見に来た。」

様子を見に来たって！　見てどうする！！

「さすがにハンサムボーイには仕事をおしつけるわけにはいかなかったから家がかたづいていない。
どうしてくれる！」

言い返す元気もない。こんな病人を前にしてもこの人は相変わらずのマイペース。

「啓くんは？」

「啓なら昨日別れた。」

はい？何を言ってるのか今の私の頭では処理するのに時間がかかって……。別れたって、別れたってこと？なぜ？どうして？そんなにすっぱり言い切れるものなの？もしかして聞き間違い？？

「啓くんと別れたんですか？」

「だからそうだと言ってるだろう。」

ポカーン……。って先生！あんなにラブラブだったのに、あんなに毎日一緒にいたのに！
ダメだ。思考回路が止まりそうです。

「それより、何か食べるか？軽いものなら作れる。それともマンゴー食べるか？」

先生はお料理できるのですか？ 一度もキッチンに立っている姿を拝見したことがございません。

そしてなぜマンゴー？マンゴーオンリーなのは意味がある？マンゴーは風邪にいいの？

もう、思考回路が沸騰しそうだったのでウンウンとうなずくことしかできなかったのです。

カタカタカタ。 ジュー。

しばらくしてキッチンから良いにおいが漂ってきて、でもすぐにそれは焦げくさい匂いに変わりその後先生の叫び声が聞こえてきました。そしてそしてしばらくするとマンゴーと格闘する先生の声が聴こ

えてきました。おまえ、着ている服が分厚いぞ！早く脱げとかなんとか・・・・・・・・。

「よし！できたぞ。待たせたな！」

なんじゃこりゃ！

重いからだを起こして目の前に出されたものを見ると、マンゴーの原型のままの状態の物と、半分黒くなった卵焼きらしきものと、お湯を注ぐだけの御茶漬けだった。

私は迷わず御茶漬けを手を取った。

「どうだ！うまいか？」

あきらかに先生は期待している。私が美味しいというのを。お湯を

注いだだけの御茶漬けを美味しいといって喜ぶのはまさにここに
いる先生、ただ一人かもしれない。

「とっても美味しいです。」

なんにしろ作ってくれたことには変わらない。その上でお礼を言う
のは礼儀。

その後は言うまでもなく先生はご機嫌！ 一件落着！！

「行き付けの薬剤師にこれを薦められた。張つとけ。すぐ良くなる
ぞ！！」

ペタン！

先生はわたしのおでこに冷静シートを張ってくれた。これがなんと
も気持ちいい。

熱がみるみるうちに下がっていったそんな感覚。

というか、よくよく考えると何で先生はこんなに優しんだろう？ い
つもはこれぞとばかりに家政婦扱いされるのに。もしかして啓く
んと別れたことが本当なら一人でいるのが寂しいとか？

理由は何であれ先生の以外な一面を見れたことは新しい発見！！私
もそばにいてくれるだけで心なしか安心する。先生は同姓愛者だか
ら何が起ることもないし、もう少しいて欲しいなと思うのは自分
が弱ってるからなのか、それとも単なるわがままなのか。

「他に欲しいものはあるか？ 足りなかったら買ってくるぞ。」

「大丈夫です……。ありがとうございます。」

「そうか。なら、そろそろ失礼するぞ。」

先生が立ち上がろうとした瞬間、私は少しのわがままを表に出してしまった。

先生のシャツの袖を掴んでしまいました。これじゃ、やってること
はカップルと一緒にじゃないのー！

と自分に突っ込んだところでもう取り返しはつかない。その後の先生
の反応」はどうでるのでしょうか？

きつといつもの調子の先生だったら、「甘えるな！」とか言っ
てスパッツと切り捨てるんでしょうけど、

「しょうがない。」

と言ってその場に座り込んだままこっちを見ていた。やっぱりおか
しい。何だか先生じゃないみたいだな。いつまでいてくれたのかは
分からなかったけど、少なくとも私が眠るまでは先生の気配を感じ
ていた。本当にどうしたんだろう。もしかしたら全部夢なのかなー。
そんなことを考えながら私は眠りについた。

ピンポーン！

どしよう。この間のことが頭から離れない。あの後私が目を
覚ました時には先生の姿はなくて、

テーブルの上に卵焼きらしきものが置かれていて、何やらケチャップで「リベンジ！」と書かれていて、ほんとに子供みたいなんだから、と思いながら思わず笑ってしまった。自分の為にやってくれたんだと思うとちょっと嬉しかったけど、久しぶりの先生宅訪問に何をこんなにドキドキしているのか自分でもよく分かりません。

いつもどおりにづけつけと入って行けばいいだけなのに、先生の顔を見たらどう対応してよいのか分からない・・・。

バタンツ！

「何をやっている！油をうつてないでさっさと入って来なさい。ただでさえ人手が足りないんだ。とりあえず最初は買い物だ！必要なことはメモしてある。分からなかったら電話をくれ。道草するんじゃないぞ。では行ってらっしゃい！！」

バタンツ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

うかつだった！相手はあの自己中極まりない 天美 蓮 だということ忘れていた。

いつもどおり。

いつもどおりの対応にちょっと一安心する自分だったけど、いつもよりも人使いが荒いのは気のせいかな？ たぶん啓くんと別れたと

言っていたのは本当みたい。 どうしてそんなにいきなり。 聞きたいけど聞けない……。 というかさつきは一言もしゃべらせしてくれなかった！！！

もしかして、啓くんの分は全部私にまわってくるとか……。 無理です。 私はただのつたない編集部にすぎませんから。

ああ、先が思いやられます。

「雪華さん。」

そんなことを考えながら近くのスーパーにたどり着いた時だった。

いつもの可愛いらしい啓くんじゃないですか！

「どうしたの？ こんなところで？ あっ、もしかして先生のところに行くの？」

単刀直入すぎるかと思ったけど、この子なら聞ける気がした。だって気になるもの。

「違うんです。 雪華さんを待っていたんです。 僕の代わりにここに来るかと思って。 ごめんなさい。」

そんな、謝ることじゃないでしょーに。

「蓮は元気ですか？ 僕のこと何か言ってますでした？」

こんなけなげな子が、こんなことを言って………って、もしかして先生が別れようって言ったとか？ うそ！ ありえないわ！！！！

「僕、蓮に嫌われちゃったみたいで………でも、理由が分からなくて。 蓮が何を考えているのか分からないんです………」

みるみるうちに啓くんのスカイブルーの瞳からなんとも美しい涙がポタポタと………って、こんな公共の場で泣かれてしまったのは困るんですけどー。 まるで私がいじめてるみたいじゃないですか！！！！

とりあえず、どうか啓くんをなだめて先生に言われた買い物も済まして、先生宅と一緒に引っ張って行くことにした。
何でも啓くんの話はこう。

ベットで絡みあっている最中だったらしい。

「啓、この後どうしたい？」

「この後って？ この後どうして欲しいってこと？」

「違う。お前はこれから何をしたいんだと聞いているんだ？」

「何だよいきなり？ 僕はずっと蓮のそばにいたいよ。」

「お前はまえに留学がしたいと言っていただろう？ それはどうなつたんだ？」

「何で今そんなこと言うんだよ？ 蓮、変だよ！」

「俺の質問に答えろ。」

「だから僕は留学なんてしないで蓮のそばにずっといる！」

「それは俺が許さない。お前をずっと手元に置いておくつもりはない。」

「どうして！何だよ急に！！ 何言ってるのか分からない……。」

「啓……。」

「少し距離を置こう。明日からはここに来なくていい。」

啓くんが話すには、この日の先生はとても乱暴で荒々しかったらしい。

そこまで聞いてませんが、啓くんは本当に悩んでるみたい。

私も話を聞いたところで先生が何を言いたいのかなんてさっぱり！

これじゃ一方的に言われた啓くんがかわいそう。

ピンポーン！

「先生、戻りましたよー！」

バタンツ！

「遅いぞ！ 道草するなと言っただろう！」

勢いよく出てきた先生は、私の後ろにいる啓くんに気がついた。

「何しに来たんだ？」

「もうここには来るなと言っただろう。」

「先生！何もそんなに冷たくすることないでしょう。啓くんは先生の言っていることがよく分からないって。ちゃんとした理由が聞きたいって……。」

先生の冷たい対応に私も少し腹がたったのか勢いよく言葉が出てしまっていた。

そんな言い方じゃ啓くんも納得なんかできない。

「君には関係のないことだ。首をつっこむな!!」

だんだん腹がたってきた!首をつっこむですって!!! 巻き込まれてるのはこっちのほうなんですけど! もうこうなったらとことん首をつっこんでやる!!

「だから! 先生のせいでこんなことになってるんでしょ? いきなり距離を置こうなんて言われたって意味がわかりませんよ! 啓くんはどうしたらいいのか分からないって悩んでいます。ちゃんとした理由を言ってあげてください。ちゃんとした理由を聞くまでは、私も帰りませんから!!! 分かりました!」

「啓くん! 入りなさい!!」

啓くんの手を引きながら、何でこんなに私興奮してるんだろうと思えてきた。

とんだおせっかいさん。 言ってしまった手前、帰るに帰れません。
.....

ああ、先生の原稿今日中に提出しなくちゃいけないのに.....
.....
これじゃー原稿のことにすらふれられない。 まずった私.....

「先生、啓くん、とりあえず座りましょう。」

私は、リビングにあるソファーに二人を座らせた。
沈黙が続くこと五分。

ええーいじれたい！

私が話そうとした瞬間に啓くんが口を開いた。

「蓮は僕と別れたいの？　僕が嫌いになったの？」

「・・・・・・・・・・。」

どうして何も言ってあげないの？先生！

「僕は蓮が好きだよ。僕に悪いところがあるならちゃんと直すから、だからそばにいさせて・・・・。」

今にも泣き出しそうな声で話す啓くん。なんとけなげなんでしょう。この子はぜんぜん悪くありません。悪いのは全部この先生ですよー！

先生はそんな啓くんを見てゆっくりと話はじめた。

「俺は、啓を嫌いになったわけじゃない。だがこのまま一緒にいても良い方向に進まない。啓、お前は俺と付き合う前に留学をしたいと話してくれたことがあった。だが今は、お前はまったく

先を見なくなった。 お前の生活が俺中心になってるからだ。

お前は俺と離れて、もう一度自分のことを考えるんだ。 俺がそばにいたらお前は俺に甘えてしまう。 啓、お前も分かっているだろう。 この生活は長くは続けられないということを。」

啓くんは下を向いたままじっと動かなかった。 突きつけられた答えを本当は分かっていたかのように、啓くんは返す言葉を見つけれないでいるみたいだった。

先生はちゃんと考えていたんだ。 いつも自分のことばかりかと思っていたけど、先生は自分のこと以上に相手のことを考える。

「分かったよ。蓮。」

そう言って啓くんはその場を去った。 玄関へ向かう啓くんの後ろ姿が、何だか少しだけ大きく見えた気がした。

「とんだおせっかいだな、君も！」

先生がこっちをにらんでいる。 おせっかいですみませんねー！
！。 そういう性格なんです。

「だが、啓がちゃんと分かってくれたみたいで一安心だ。助かった。」

もしかしてお礼のつもりー！
でも降らなきゃいいけど。
珍しいこともあるものだ。 雪

先生は自分の部屋に戻ると原稿を手にして戻ってきた。
原稿！！
そうだ

原稿のことなどすっかり忘れていた自分にびっくりした。
先生の原稿を手にしようとしたら、
慌てて

ヒョイ！

「腹が減った。何か作ってくれ。」

私はすっかり忘れていた。この人は自己中極まりない、あの天
美 蓮 だということを・・・・。

私はペットかはたまた家政婦か、それとも同棲中の彼女か！！
いいえ違います。

ただのつたない編集部員ですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3060h/>

オセロ

2010年10月8日22時00分発行